説教『主において喜びなさい』

小河信一 牧師

フィリピの信徒への手紙 3章1節～6節

1 では、わたしの兄弟たち、主において喜びなさい。同じことをもう一度書きますが、これはわたしには煩わしいことではなく、あなたがたにとって安全なことなのです。
2 あの犬どもに注意しなさい。よこしまな働き手たちに気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい。3 彼らではなく、わたしたちこそ真の割礼を受けた者です。わたしたちは神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです。4 とはいえ、肉にも頼ろうと思えば、わたしは頼れなくはない。だれかほかに、肉に頼れると思う人がいるなら、わたしはなおさらのことです。5 わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、6 熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。

フィリピの信徒への手紙 3:1――
主において喜びなさい。

フィリピの信徒への手紙 4:4――
主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。
私たちは待降節……より大きくキリスト教の暦から見れば一年の始まりの時……を過ごすにあたり、まことの喜びをまことの喜びとして、感謝と賛美をもって受け止めるかどうか、が問われています。そして、私たちが、正しい信仰と忍耐をもって、そのまことの喜びに「常に」あずかり続けることができるかどうか、が問われています。
この神からの問いかけにまっすぐに向き合い、まことの喜びに生かされている信仰者として、御子、イエス・キリストの誕生を心から喜び祝いたいと願います。

まことの喜びは、神が永遠のむかしに、私たち人間に対し立てられた救いの計画の中で、「今日」というこの日にあらわされたものです。私たちは、「今日」という日に出会うためにも、神の遠大な計画とその歴史を顧みる必要があります。その中で、私たちは、まことの喜びが偽りの喜びや束(つか)の間の喜びにすり替えられたり、あるいは、神からの喜びと同時に高慢さや嫉妬に根を張る自己中心の喜びが並置されたり、などという人間の罪深い足跡を知らされることでしょう。
知らされるというよりも、今、自分がそれらの喜びに取り巻かれている状態であると認めざるを得ないでしょう。甘美な罪の誘惑に浸るか、あるいは、そこから脱出できるかは、「主において喜びなさい」というその「主において」に掛かっています。クリスマスは、「主において」祝う、「主において」喜ぶという神と私たちの関係性・交わりを、幼な子イエスを拝む礼拝を通して確認し回復する恵みの時です。

そこで、煩(わずら)わしいことと厭(いと)わずに(フィリピ 3:1)、喜びに生きようとする信仰者の生活を振り返ってみましょう。ここでは、詩編詩人とパウロ双方が用いた「犬ども」という言葉が鍵語になります。私たちは詩編をたどることにより、この「犬ども」という人をののしる「蔑称(べっしょう)」がパウロの発案ではなく、もともと聖なる書の字句であったことを知らされます。

詩編 22:17,21――
　17 犬どもがわたしを取り囲み
さいなむ者が群がってわたしを囲み
獅子のようにわたしの手足を砕く。
21 わたしの魂を剣から救い出し
わたしの身を犬どもから救い出してください。

まず、詩編 22:2-3「苦悶(くもん)」(主イエスが十字架上で叫ばれた詩句を含む)→22:17-19「嘆き」→22:20-22「祈り」という流れの中に、神に逆らう「犬ども」との闘いが置かれていることに注意しましょう。すなわち、詩人は「自分の無力を思い知らされつつ、最後の力をふり絞って神にすがりつき、神に切願している」(A.ヴァイザー)のです。
絶えず、あちこちから自分の悲しみや自分の喜びが絡(から)み付いてくる中で、「主において喜びなさい」という「わたしの力の神」(詩編 22:20)の招きの声は、あなたの耳に届いているでしょうか。私たちは深刻な苦悶や嘆きを貫いて、祈り続けられるでしょうか。
その点で、詩編 22 の指し示す答え、すなわち、旧約から新約へと切り開かれた道は、その苦悶や嘆きを貫く祈りこそ、イエス・キリストが祈られた祈りではないか、それ故に、私たちもまた「主イエスによって」祈り続けられる、ということです。
実際、主イエスの十字架上の叫び(マタイ 27:46)と同一の詩句「わたしの神よ、わたしの神よ なぜわたしをお見捨てになるのか」で始められた詩編 22 は、感謝と賛美(22:23-27)へ到達しています。神の勝利と私たちの健やかな命に対する確信が貫かれています。

それにしても、詩人が対面した「犬ども」とは、一体、何ものなのでしょうか?
はっきりと分かることは、「獅子のようにわたしの手足を砕く」(22:17)や「骨が数えられる程になったわたしのからだ」(22:18)との証言から、詩人の身心が死の危機に瀕しているということです。そのように、「犬ども」は私たちを肉体の死へ、そして、「わたしの力の神」への信仰を萎(な)えさせる霊的な死へと追いやるものです。
そうであれば、この詩編 22 を、主イエス・キリストが祈ってくださったことの意義深さが汲み取られることでしょう。「犬ども」の暴虐が私たちを罪と死に追い込むとき、主イエス・キリストが私たちに代わって、「犬ども」に対峙してくださり、主ご自身が十字架の丘にまで追い詰められていったのです。

詩編 22 に貫徹された祈り＝主イエスの祈りという基軸によって、少し先まで見通してしまったかもしれません。ところで、パウロは、フィリピの教会の中に（！）、どんな「犬ども」の姿を眺めていたのでしょうか。
今、パウロは、イエス・キリストが十字架と復活によって罪と死を滅ぼしてくださったという福音、すなわち、喜びの知らせを宣べ伝えています。「犬ども」の敗北は決定的です。それなのに、どこに「犬ども」が潜(ひそ)んでいると言うのでしょう。
パウロに倣って、私も同じことをもう一度書きますが（フィリピ 3:1）、「煩(わずら)わしいことと厭(いと)わずに」、信仰上の安全へと導くパウロの警告を傾聴しましょう。

フィリピの信徒への手紙 3:2――
あの犬どもに注意しなさい。よこしまな働き手たちに気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい。

「注意しなさい」・「気をつけなさい」・「警戒しなさい」は、もともと同一の動詞「見分ける」で、それが三通りに訳し分けられています。従って、「犬ども」・「よこしまな働き手たち」・「切り傷にすぎない割礼を持つ者たち」は同一のグループを指していることが分かります。
パウロが詩編 22 の言葉を受け継いで「犬ども」と呼んでいる人々は、そのものずばり、「よこしまな働き手たち」です。
彼らは、業績を上げようとしますが、それは結局、「自分の」ものであり、神に喜ばれない「悪い」ものです。カルヴァンは「パウロは、彼らを悪い働き手と呼んでいる。これは、彼らが教会を築き上げようとしていると装(よそお)って、すべてを損(そこ)ない、破壊する以外の何事もしなかった、という意味である」と喝破(かっぱ)しています。
「～しているが、実は～していない」……本人は「～している」と思い込んでいますから、「～していない」ことに気付き難い状態にあります。深刻なことは、彼らの熱心さが、教会形成の妨げになっているということです。
そこで、パウロの勧告はさらに続きます。
「切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい。」
「犬ども」を徹底的に追及するということで、私ならば高揚し、悪業追放の業績を誇りそうになりますが、パウロは主にあって冷静です。彼らのことを今度は、「切り傷にすぎない割礼を持つ者たち」（原語では「切り傷」という一言）と皮肉っています。
「切り傷」など、目の前の公園で遊んでいる子供たちが日々こしらえているものではありませんか。皮肉られた「割礼」信奉者の紅潮した顔が目に浮かんできます。
彼らは、アブラハムが受けた、すなわち、旧約聖書（創世記 17:10-14）に規定された割礼ではないかと反論するかもしれません。しかし、彼らは、古いものが、イエス・キリストへの信仰において、すべて新しくなったという福音を、福音として受け取っていません。
時を逆行するかのように、単なる古傷を、重んじるべき「割礼」だと言って、自ら誇り、他の人に押し付

けようとしています。
E.トゥルナイゼンは、「彼らは、他に割礼でも何でもいい、何かが加わらなければ、信仰生活は本当のものにならないと言うのである」と指摘しています。人からよく思われたいからでしょうか（ガラテヤ 6:12-13）、あるいは、人から非難されたくないからでしょうか。他者への見栄や自己の保身が、私たちを福音プラスアルファへ、または十字架プラスアルファへと走らせます。「良いことをしているのだから、福音を妨げてはいない」と思い込み、自己中心になっていること（Ｉテモテ 4:16）を、聖霊の助けにあずかって内省しようとしません。その点、手紙の直後の節（フィリピ 3:5-9）で、パウロが自ら、自分の「割礼」「誇り」「頼り」「熱心さ」など、一つ一つ点検し顧みているのは、見事です。真摯に、かつてキリスト者を迫害していたこと（使徒言行録 7:58－8:1）を告白することなど、彼のへりくだりは際立っています。
ここでパウロは、フィリピの教会の信徒の方々よ、あなたがたは「見分けなさい」と繰り返していますが、誰が「犬ども」なのか、言明していません。それとなく示唆するだけで、フィリピの教会の中では、誰なのか、分明だからでしょう。ただし、手紙を読んでいるこの「私」も論外ではないという謙虚さをもって、パウロの勧告に傾聴することが大切でしょう。

フィリピの信徒への手紙 3:3――
彼らではなく、わたしたちこそ真の割礼を受けた者です。わたしたちは神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです。

福音による勝利のスローガン「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」（ローマ 12:21）との自分の言葉の通り、パウロは、「犬ども」という悪に取り巻かれている教会の人々に、善なるものを提示しています。ここには、悪者退治の方法論ではなく、善なるものの本体、つまり、神の〈真実〉に触れることが本筋であるというパウロの健全さがうかがえます。

パウロは、ここに三つの大切なことを教えてくれています。
①「神の霊によって礼拝し」
②「キリスト・イエスを誇りとし」
③「肉に頼らない」

中心点である①を、具体的に肯定②と否定③の両面から説明しています。
②「キリスト・イエス」と③「肉」、及び、②「誇る」と③「頼らない」は対照的になっています。礼拝を基とする「汝（なんじ）」なる神との堅い関係に照らして、「我」の立場を捉えていると言えるでしょう。
ここで「肉に頼る」というのは、肉、すなわち、人間の力を「信じきっている」（それに洗脳されている）という意味です。だからこそ、礼拝の力を信じて、人間の力から解き放たれることが大事なのです。それによって、キリスト・イエス以外のものを誇ろうとする過ちから免（まぬか）れ、ひたすらキリストを誇り、あがめる、パウロのように、光輝に満ち、安全な（フィリピ 3:1）生活を送る者とならせていただくのです。

「神の霊によって礼拝する」というのは、主イエスの教えによれば、「霊と真理をもって父（神）を礼拝する」（ヨハネ福音書 4:23）ことです。
それは、父なる神が御子、イエス・キリストを遣わして、私たちを罪から救い出してくださった、その恵みを、私たちが霊によって知ることから始まります。そうして、恵みに満たされた一人ひとりが共に集い、神の民となり、感謝と賛美をもって礼拝を捧げるのです。そこでは、私たちの日常の生活全部が、また、自分の体と魂が捧げられます（ローマ 12:1）。その時、主の日は、「恵みの時」・「救いの日」（Ⅱコリント 6:2）となり、神の愛と真理が私たちの生活の隅々へと至る力が与えられます。

自分自身の内外にいる「犬ども」に警戒しましょう。そこで戸惑い、考え込む私（ルカ 1:29）のありのままの姿で、上から来たり、どん底にいる私を救い出す神の恵みにあずかりましょう。その時、私たちは自分が置かれている事情がどうであれ、主において喜ぶことができます。そして、自分や自分の教会に与えられたまことの喜びを基盤として、私たちは、隣人に対する喜びの〈協力者〉（Ⅱコリント 1:24）として、この世に派遣されるのです。

讃美歌 495 番 3 節――

　十字架の上に　よろこびあり
　たえず御陰(みかげ)に　よらせたまえ
　我はほこらん　ただ十字架を
　天(あま)ついこいに　入(い)るときまで